
ウメッシュ！

水色ペンキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウメツシュ！

【Nコード】

N2558E

【作者名】

水色ペンキ

【あらすじ】

退職した後輩の山本が古道具屋を始めた。彼の店を訪れた俺は、山本の様子がちょっと変わっていることに気がつく。脳の摘出手術をしたというのだ。それは大きな瓶に入れられて、帳面台の奥に置かれていた。

「先日、脳を摘出してね」

山本は言った。頬がこけて強い無精髭が顎を取り巻くこの男に、かつて会社で机を並べていたときの快活さはなかった。仄暗い帳面台の向こうで白熱灯に照らされたその顔は、売り物の中に混ざった瑣瑣引きの仏像のようだ。

「脳を？ どっちの？」

「ぜんぶ、です」

「まさか——」

冗談だと思つて答えた俺に、山本の表情は固かった。縁なしの丸眼鏡が俺の背後から届くガラス戸越しの日光を反射して、この友人の目の表情を黄色く隠している。山本は灰皿の縁に載せていた紙巻きを取ると、控えめにそれを吸い込み、脇に並べた飴色のガラクタの中にふうと吹き込んだ。

「皆さん冗談だと仰いますね。実際私もやるまでは、そんなこと到底無理だと思つていました——」

彼は身を捻ると、背後から大きな瓶を取り出した。肉厚のガラスが重そうで、上から掛けた芥子色の繻子のために、中が何かは分からない。山本が大きな両手を円い側面につけて持ち上げると、瓶を覆っていた繻子の裾が少しめくれて、ラム酒の一種にあるような、きめの細かい金色の液体が中に充たされているのがわかった。そして上部の隠しから、茶色い魚の尾のようなものが底に向かって垂れているのが垣間見える。蝮か何かだろうか。

「これです——驚かれると思いますよ」

瓶を帳面台の上に置いて、山本が言う。ガラスの底がごとりと音を立てた瞬間、いつかな表情を変えなかった彼が、わずかに顔をしかめるのがわかった。まるで小さな頭痛がしたみたいに。

繻子が払われる。その中であつたのは、そう——彼の脳だった。

「今は、こうしています」

語る彼の声は落ち着いている。胡桃の実のような脳は逞しい襞を作って左右に分かれ、金色の液体の真ん中に静かに浮かんでいた。その下部に玉のような別な組織があつて、そこと本体の合わいから鰻の尾のような延髄が所在なげにぶら下がっている。所在なげというのは、その下に繋がるべきものが何もなくつたからだ。人間神経の終端は、液の中にぶつりと途切れていた。

「そんな——冗談だろう」

息を詰める俺に、山本は静かに笑う。いいえ、もうひと月ばかりこうしているんです、頭が軽くなつて、偏頭痛も収まりましたよ——そういう後輩の声がうつろに聞こえる。風の強い日に遠くから呼ぶ人の語尾だけが高くばらばらに聞こえて、相手が意を通じたと信じる笑顔のみが妙に強調されているような、そういう茫としたよそよそしさのある声だった。

「先輩？」

「ああ、うん」

我に返った。つくづく奇妙な状況だ。俺は口元に作り笑いを浮かべて、当たり前障りのない質問を探そうと努めた。

「でも、脳を抜いてしまったらものが考えられなくなるんじゃないか？」

「なぜです？」

「なぜって、そりゃあ脳がないわけだから——」いいながら、言つてよかったのか迷いだす。

「あるじゃないですか——ここに」

山本は瑪瑙のように白い歯を見せて瓶をさすった。

「いや、だからそれは——繋がっていないじゃないか、お前と」俺は上目遣いで相手を見る。

「それは大丈夫です、もともと電線やワイヤーで繋がっているものではありませんし」

「そう——なのかな」

「ほら、脳の様子は見て分かるじゃありませんか。向こうからこちらへはちゃんと情報が伝わってきます。僕もこうやって瓶に触れていれば、」掌をガラスに当てて、「向こうにだって分かりますよ——熱が、伝わりますから」

「ふうむ」

俺は脳の専門家ではないから、そういうことがあると言われて絶対にないとは言えない。ただ俺の常識と本能は、見るものを完全に否定していた。彼の笑顔が蠟人形のように見える。巧みでまるで人のよう、まるで俺の後輩のよう、だ、が——何か別の、何か。こいつさつき、向こうとか言わなかったか。

「なんだか頭痛がしてきたよ。いろいろ興味深いけど、ちょっと整理がつかないな。また今度来る」

俺はそういつて椅子から立ち上がった。実際、頭が痛い。

「だったら！ 紹介状を書きますよ！」山本が叫んだ。やはり読めぬ目の脇で、深いえくぼが刃を入れたような鋭い襞を作っている。

「興味がおありでしたら、ねえ、先輩も——」長い腕が伸びて俺の手を握った。山本の皮膚は湿って、土のように冷たかった。

俺は激しい目眩を覚えた、それから気を失い、そして——

今は頭が軽い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2558e/>

ウメッシュ！

2010年10月18日18時57分発行